

〈研究ノート〉

中国人日本語上級学習者の発話の長さ
と情報量の関係
——依頼に対する「断り」行為を事例として——

蒙 韞

An Analysis of the Relationship between
Length of the Utterance and Amount of
Information in Chinese Advanced Learners
of Japanese: the Case of Refusing Requests

MENG Yun

The purpose of this study is to examine the relationship between the length of an utterance and the amount of information in Chinese advanced learners of Japanese. This research is based on politeness theory, and data was collected using a Discourse Completion Test. A total of 215 significant responses were obtained from 49 native Japanese speakers, 59 native Chinese speakers and 107 Chinese learners of Japanese. The Japanese learners were divided into three groups according to length of residence in Japan. The data was analyzed using the *semantic formulas* method, which is common in the field of comparative pragmatics and interlanguage pragmatics. In addition, the author analyzed the utterances in terms of letters of the Japanese syllabary. Results showed that as length of residence in Japan increased, the utterances of Chinese advanced learners of Japanese became longer than those of the native Japanese speakers, and that in these advanced learners variations in the amount of information contained in conversation are related to variations in the length of the utterance. Furthermore, the results showed that when measuring the length of an utterance, the number of *semantic formulas* could not be counted precisely using the conventional method for *semantic formulas*.

キーワード: 発話の長さ、情報量、中国人日本語上級学習者、断り行為

はじめに

日本語学習者の中には、文法や発音面での日本語が流暢であっても、コミュニケーションがスムーズにいかないという問題にしばしば直面する学習者がいる。これは言語学的レベルにとどまらず、社会文化やポライトネスのルールの違いなども関わっているためである。そのため、近年、日本語教育における学習者の中間言語¹⁾の研究対象は、音声・形態・統語論のレベルから、意味・語用論のレベルまで広がってきた(李 2004、27頁)。そのうち、日本語学習者の語用論的能力の習得研究では、語用論的誤りの潜在的原因の1つとして、日本語学習者が日本語で日本語母語話者とコミュニケーションする際にことばを多く使いすぎるという現象が指摘されている。ことばを多く使うべき時に言わな(言えな)かったり、逆に、ことばを抑えるべき時に多弁になってしまったりすることは、いずれも、語用論的能力に関する問題点とされるが、後者のほうが円滑なコミュニケーションをする上では大きな障害となる(関山 2004、54頁)。本稿では、依頼に対する「断り」行為において、この発話の長さ、つまり、言葉数²⁾、会話に含まれる情報量の多寡及び敬語・丁寧表現のような長めの単語の使用程度に焦点を当て、意味公式³⁾と文字数による分析から、日本語学習者の発話の長さと言語滞期間との関係を考察する。

1. 先行研究と研究課題

断りにおける日本語学習者の語用論的特徴を考察した主要なものとして、生駒・志村(1993)、藤森(1994)、伊藤(2004)、Roungtheera(2004)と蒙(2008)の研究が挙げられる。これらの先行研究は、断り行為において日本語学習者に語用論的転移が見られたと指摘している。しかし、これらの先行研究の中には、学習者の日本語レベルを統一基準で位置づけていなく、日本語の学習歴によるレベルわけをするものが多かったが、その妥当性は疑問である。そのため、日本語の学習歴より、認定テストの等級によるレベルわけのほうが学習者の日本語能力をより客観的判断できると考え

中国人日本語上級学習者の発話の長さと言量との関係

られる。また、これらの先行研究では、談話完成テスト (Discourse Completion Test、以下では DCT と略す) の主な分析方法として意味公式による分析を使用しているが、発話の意味的なつながりの判断が研究者によって異なるため、意味公式のカウントの方法は未だに統一されていない。このような処理基準が完全とは言えない意味公式による分析を用いた場合、発話の長さを測る際に、発話の長さが持つ情報を、正確に反映できない可能性があると考えられる。また、伊藤 (2004) は、初級から上級までの日本語学習者のポライトネスと、日本滞在期間の関係を考察したが、筆者の調べる限り、中国人日本語学習者が上級レベルに達した後の発話の長さ、日本滞在期間の関係を検討した研究は見当たらない。そこで、本稿は、まず意味公式のカウントの方法を統一し、従来の意味公式を用いた分析を新たに行う。次に、従来の意味公式による分析の限界を探るため、発話の長

表 1 調査対象者

調査対象者	グループ	滞在期間 (平均)	人数 (名)	年齢 (平均)
日本の企業で事務職に就いている日本人会社員 ⁴⁾ 。	JJ		49 名 (男: 19 名 女: 30 名)	22~44 歳 (平均 30 歳)
日本の大学・大学院に留学している中国人日本語上級学習者 ⁵⁾ 。	JSL1	4 ヶ月から 2 年 4 ヶ月まで (平均 1 年 4 ヶ月)	38 名 (男: 7 名 女: 31 名)	21~29 歳 (平均 25 歳)
	JSL2	2 年 5 ヶ月から 4 年 4 ヶ月まで (平均 3 年 5 ヶ月)	37 名 (男: 11 名 女: 26 名)	21~32 歳 (平均 26 歳)
	JSL3	4 年 5 ヶ月から 11 年 10 ヶ月まで (平均 6 年 3 ヶ月)	32 名 (男: 8 名 女: 24 名)	23~37 歳 (平均 28 歳)
中国の国営・民営の企業で、事務職に就いている中国人会社員 ⁶⁾ 。	CC		59 名 (男: 33 名 女: 26 名)	22~33 歳 (平均 25 歳)

さを測る時、文字数による分析を試みる。最後に、このような意味公式と文字数による分析から、日本滞在期間の長さが中国人日本語上級学習者の発話の長さにとどのような影響を与えるか、またその要因が何であることを明らかにする。

2. 調査

2-1 調査対象者

本研究の調査対象者を以下の表1に示す。

一般的に滞在期間が長くなるにつれて、日本語学習者は日本語母語話者との接触が多くなると思われるが、本調査の調査対象者である JSL と JJ の場合、そのようにはならなかった可能性がある。そこで、アルバイトや学校、日常生活で日本語を使用している学習者の、日本語母語話者との接触状況をアンケート調査⁷⁾で調べた。JSL と JJ との接触量の得点を従属変数として、その正規性を統計ソフトの R の Shapiro-Wilk normality test で調べた。その結果、p-value が 0.05 以上であったことから、正規分布していると見なした。よって、パラメトリック検定の一元配置分散分析⁸⁾を行った。その結果、滞在期間が長くなるにつれて、JSL は JJ との接触が多くなることを検証できた。

2-2 データの収集方法

本稿では、DCT (談話完成テスト) を用いてデータを収集した。DCT は場面設定、会話の相手のせりふとその相手に対する答えを書き入れる空白欄から構成される。場面設定は表2のとおりである。

会話の相手のいない DCT のような記述式調査では、断りという発話行為を相互行為として捉えることが難しい。しかし、DCT の利点として、ある言語の発話行為の典型を観察できること、大量の発話データを短期間で集められること、様々な場面設定が組み込めることなどが挙げられる。さらに、DCT では実際の会話で使われる意味公式及びストラテジーを観察することができる (Beebe and Cummings, 1996) と言われている。以上の

表2 DCTの場面設定

場面	対話の相手	状況
1	仲のいい友達	借金を頼まれる
2	普通の友達	借金を頼まれる
3	親しい上司	残業を頼まれる
4	普段あまり話すことのない上司	残業を頼まれる

ような DCT の利点を重視し、本稿では、データの収集方法として DCT を採用することにした。

2-3 データの分析方法

2-3-1 意味公式による分析の方法

発話内容の分析は、DCT で得られた発話から意味公式を抽出してから、その意味公式を機能別に分類⁹⁾した。意味公式は {結論} {言いよどみ} {理由} {詫び} {代案} {関係維持} {共感} {感謝} {情報} {条件} {承諾} {間投詞的表出} {ためらい・相づち} {呼称} {非難} {賞賛} {その他} の 17 に分類した。なお、意味公式は { } と表記する。

本稿は次の手順にて意味公式の分析を行った。分析に携わったのは筆者及び日本語教育を専攻している日本人の大学院生 2 名と中国語教育を専攻している日本人の大学院生 1 名である。まず、JJ と JSL 個々の発話についてのデータが意味公式のどの機能に該当するかを、各自で判断していった。一方、CC のデータは、筆者、中国人の中国語アナウンサー 1 名、中国語に特に堪能である中国人¹⁰⁾ 1 名、日本語を専攻している中国人の大学院生 1 名が JJ と JSL のデータと同様の方法で判断した。ついで、判断したデータを持ち寄って意見の交換を行った。分類の判断が分かれた場合は基本的に多数決とし、同数に分かれた場合は話し合っで判断した。どうしても判断が一致しない極少数の事例に限り、筆者が判断した。全体的には、JJ と JSL のデータに対する評定者間の判断の一致度は 89.5%、CC は

89.7%であった。

また、伊藤(2004)に倣い、「言語表現が長い」とは意味公式の数が多いと同義であると見なす。例えば、「ごめんなさい、なんとかしてあげたいけれど、そんなには持っていないから、貸してあげられないんだけど」という発話は、「相手の意向に添えないことを負担に感じている旨の表明」、「相手の意向に添いたい心情の表明」、「相手の意向に添えない理由の表明」、「直接的な断りの表現」の4つの意味機能を働いているため、{詫び}{共感}{理由}{結論}という4つの意味公式から成っていると分析され、それぞれの意味公式の頻度は各1とカウントする。また、代案と理由の場合、以下のような発話があった。

Xさんに頼んでみたらどう？ 彼女は明日暇そうだし、いつも手早いから。

(1) 代案 (2) 代案の理由 (3) 代案の理由

このような代案のカウントの方法に関して、「(1) 代案」と「代案の理由(2)、(3)」全てが「相手との関係を維持したい旨の積極的な働きかけ」の1つの意味機能を働いていると判断されるため、これら全てを総合して{代案}1つとする。

今月のバイト料まだ手に入っていないので、持っているお金は生活費し

理由の説明(1) 理由の説明(2)

かありません。

このような理由のカウントの方法に関して、理由の説明(1)が理由の説明(2)の理由なので、理由の説明(1)と(2)全ては「相手の意向に添えない理由の表明」の1つの意味公式機能を働いていると判断される。そのため、これら全てを総合して、断りの1つの{理由}とする。

さらに、同じ言語表現を繰り返す場合、毎回の繰り返しはそれなりの意味があると考えられるので、1回を1とカウントする。なお、意味公式の得点が尺度であり、従属変数である。

2-3-2 文字数による分析の方法

本稿の文字数による分析は次の通りである。まず、日本語の漢字は仮名に直して、仮名の数で数える。句読点をつけることには個人差があるので、句読点は全角スペースに置き換えて入力する。省略を表す「…」と長音を表す「ー」はそのまま入力する。また、顔文字は分析の対象から除く。次に、文書作成ソフト「Microsoft Word」の中の「文字（スペースを含めない）」という機能を使い、文字数を数える。「しゃ」、「しゅ」、「しょ」などは1モーラ¹¹⁾になるため、1文字と数える。具体的には以下の例のようである。

じぶんもいましゅっぴがおおくて そんなたいきんないよ ごめんね
文字数：28

3. 結果

本稿で用いた意味公式と文字数のデータについては、各変数の正規性を統計ソフトの R の Shapiro-Wilk normality test を用いて調べた。結果としては、各変数の p-value が 0.05 以下であったことから、正規分布しているとは見なしにくかった。そこで、パラメトリック検定の一元配置分散分析にあたる Kruskal-Wallis というノンパラメトリック検定を行った。以下はその結果である。

3-1 意味公式による分析の結果

まず、仲のいい友達(表 3)と普通の友達(表 4)に借金を頼まれた場合に

表 3 仲のいい友達

グループ	平均値	標準偏差
JJ	3.41	1.67
JSL1	2.87	1.19
JSL2	3.59	1.40
JSL3	3.47	2.05

表 4 普通の友達

グループ	平均値	標準偏差
JJ	2.86	1.14
JSL1	2.92	1.28
JSL2	2.73	1.12
JSL3	3.13	1.48

表5 親しい上司

グループ	平均値	標準偏差
JJ	2.92	1.02
JSL1	2.97	1.28
JSL2	3.27	1.33
JSL3	3.28	1.35

表6 普段あまり話すことのない上司

グループ	平均値	標準偏差
JJ	2.78	0.87
JSL1	2.66	0.91
JSL2	3.16	1.21
JSL3	3.22	1.62

表7 意味公式による Kruskal-Wallis の検定結果

場合	主効果
仲のいい友達に借金を頼まれた場合	$\chi^2(3) = 4.25, n.s.$
普通の友達に借金を頼まれた場合	$\chi^2(3) = 0.95, n.s.$
親しい上司に残業を頼まれた場合	$\chi^2(3) = 2.73, n.s.$
普段あまり話すことのない上司に残業を頼まれた場合	$\chi^2(3) = 3.86, n.s.$

ついて、意味公式の得点の平均値とその標準偏差を示す。

次に、親しい上司(表5)と普段あまり話すことのない上司(表6)に残業を頼まれた場合について、意味公式の得点の平均値とその標準偏差を示す。

さらに、グループ間の意味公式の得点の平均値の有意差を調べるために、Kruskal-Wallisの検定を行った。その結果、「仲のいい友達に借金を頼まれた場合」、「普通の友達に借金を頼まれた場合」、「親しい上司に残業を頼まれた場合」、「普段あまり話すことのない上司に残業を頼まれた場合」の4つの場合全てにおいて、JJとJSL1、JSL2、JSL3の間に有意な主効果は見られなかった。個別のKruskal-Wallisの検定結果は表7の通りである。

3-2 文字数による分析の結果

まず、仲のいい友達(表8)と普通の友達(表9)に借金を頼まれた場合について、文字数の平均値とその標準偏差を示す。

中国人日本語上級学習者の発話の長さや情報量の関係

表 8 仲のいい友達

グループ	平均値	標準偏差
JJ	43.61	29.58
JSL1	39.74	20.91
JSL2	48.51	20.25
JSL3	54.63	40.94

表 9 普通の友達

グループ	平均値	標準偏差
JJ	28.10	13.13
JSL1	38.34	18.02
JSL2	41.76	18.69
JSL3	44.31	27.49

表 10 親しい上司

グループ	平均値	標準偏差
JJ	40.04	23.10
JSL1	40.68	15.88
JSL2	49.76	26.57
JSL3	52.69	28.78

表 11 普段あまり話すことのない上司

グループ	平均値	標準偏差
JJ	36.10	15.79
JSL1	41.82	12.84
JSL2	52.81	28.99
JSL3	58.59	40.33

表 12 文字数による Kruskal-Wallis の検定結果

場合	主効果
仲のいい友達に借金を頼まれた場合	$\chi^2(3) = 5.29, n.s.$
普通の友達に借金を頼まれた場合	$\chi^2(3) = 15.98, p < .01$
親しい上司に残業を頼まれた場合	$\chi^2(3) = 5.70, n.s.$
普段あまり話すことのない上司に残業を頼まれた場合	$\chi^2(3) = 14.26, p < .01$

次に、親しい上司(表 10)と普段あまり話すことのない上司(表 11)に残業を頼まれた場合について、文字数の平均値とその標準偏差を示す。

そして、グループ間の文字数の平均値の有意差を調べるために、Kruskal-Wallis の検定を行った。その結果は表 12 の通りである。

さらに、グループ間で有意な主効果が見られた「普通の友達に借金を頼まれた場合」と「普段あまり話すことのない上司に残業を頼まれた場合」において、各グループの平均値について Mann-Whitney による多重比較を行った。表 13 と表 14 がその結果である。

図 1 普通の友達

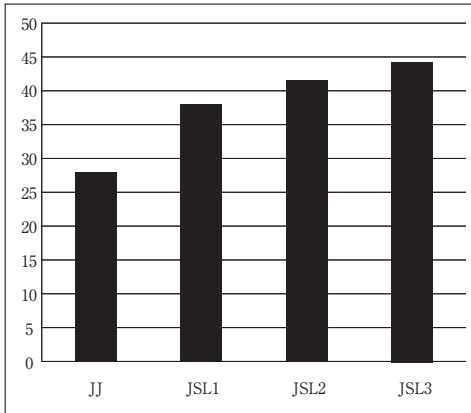


図 2 普段あまり話すことのない上司

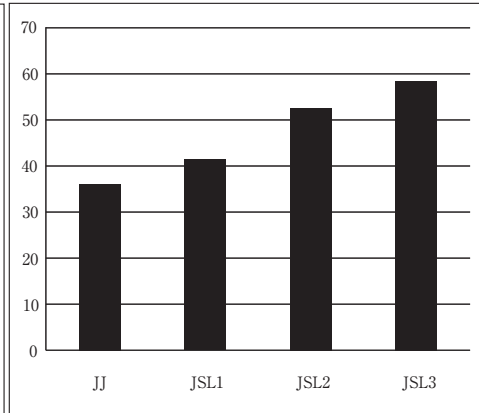


表 13 普通の友達

(I) グループ	(J) グループ	正確有意 確率 (I-J)
JJ	JSL1	.006
	JSL2	.000*
	JSL3	.004*
JSL1	JSL2	.400
	JSL3	.608
JSL2	JSL3	.823

表 14 普段あまり話すことのない上司

(I) グループ	(J) グループ	正確有意 確率 (I-J)
JJ	JSL1	.018
	JSL2	.003*
	JSL3	.003*
JSL1	JSL2	.123
	JSL3	.129
JSL2	JSL3	.869

* ボンフェローニの方法による調整済 5% 水準で有意

表 13 と表 14 のデータから、普通の友達に借金を頼まれた場合においても、普段あまり話すことのない上司に残業を頼まれた場合においても、JSL2 も JSL3 も JJ に比べて有意に長い発話をしていることが分かった。以下の図 1 と図 2 は、この 2 つの場合における各グループの平均値を示したグラフである。

図 1 と図 2 で示されているように、日本滞在期間が最も短い JSL1 の発話の長さは JJ に最も近いが、JSL2、JSL3 と日本滞在期間が長くなるにつ

れて、JSLの発話の長さはJJから次第に離れていくことが分かった。

3-1節では、JJとJSLの発話の長さを意味公式の得点で比較した。3-2節では、JJとJSLの発話の長さを文字数で比較した。意味公式による分析の場合と文字数による分析の場合では、異なる結果となった。すなわち、意味公式による分析では、JJとJSL1、JSL2、JSL3の間に、全てのケースにおいて有意な主効果は見られなかった。一方、文字数による分析では、4つの場合のうち2つには、有意な主効果が見られ、Mann-Whitneyによる多重比較で検討した結果、主効果が有意であったどちらの場合も、JJの発話より、JSL2とJSL3の発話の方が長かった。

このような意味公式による分析の結果と文字数による分析の結果の違いから、意味公式のみで分析した場合には、発話を圧縮しすぎて発話の長さが正確に測れない可能性があるため、文字数処理が、発話の長さを測る際には意味公式と同時に、必要な方法であることが明らかになった。

4. 考察

滞在期間が長くなるにつれ、逆に発話が長くなってしまいう理由として、学習者の母語での言語行動の影響、日本での日常経験の影響と日本語の会話能力の影響が考えられる。

4-1 学習者の母語での言語行動の影響

普通の友達と、普段あまり話すことのない上司の2場面で、疎遠な相手に対しては、JJは{詫び}という意味公式を最も多く使用しているのに対して、CCとJSLの3グループは、{理由}という意味公式を最も多く使用した。まず、{理由}の使用回数と割合については、JJは全意味公式の276回中88回(32%)、JSL1は全意味公式の212回中70回(33%)、JSL2は全意味公式の217回中79回(36%)、JSL3は全意味公式の203回中72回(36%)、CCは全意味公式の344回中132回(38%)であった。

次に、2場面における1人当たりの{理由}の使用回数¹²⁾に関しては、JJは1.8回、JSL1は1.84回、JSL2は2.14回、JSL3は2.25回、CCは2.24回であった。これらの数値から、疎遠な相手に対する{理由}の使用に関

して、滞在期間が長くなるにつれ、JSLはJJに比べて、徐々にCCに近くなることが分かった。この結果は、Takahashi and Beebe (1987)の語用論的転移の増加論を支持している。すなわち、滞在期間が長くなるにつれて、JSLはJJとの接触が多くなり、目標言語の社会文化的規範を徐々に身に付けていくにつれて、日本語のコミュニケーション能力が徐々に高くなる。そのため、母語の言語行動を日本語で表現することが徐々に易しくなり、母語からの語用論的転移はむしろ増加する。

4-2 日本での日常経験の影響

JSLの理由と代案の発話の具体例を取り出し、その発話内容から日本での日常経験の影響を考察する(以下の例文は全て今回のデータから抽出したものであり、例文には文法の間違いなどがあっても、そのまま引用した)。

4-2-1 理由の発話内容からの考察

まず、JSLの理由の発話の具体例を取り上げ、日本での日常経験の影響を考察する。

〈普通の友達に借金を頼まれた場合〉

(1) 私も学費で結構大変ですよ。今月も貯金ぜんぜんないです。

【JSL1 B-22】

(2) 実は私も最近金に困って、二十五日給料日まで手元に~万円しかないの、二十五日まで一週間があるしさ。

【JSL2 B-4】

(3) 急に言われてもね。月末にはもうお金がほとんど残っていないな。最近友達が中国から遊びに来て、一緒に遊んでたから、今月は私もかなりピンチなんだよね。

【JSL3 A-27】

〈普段あまり話すことのない上司に残業を頼まれた場合〉

(4) 実は明日両親が二年ぶりに故郷から来るので、いろいろ案内しなければいけない所がありますので。

【JSL1 B-32】

(5) 明日先約がありました。今からドダキャンするわけには行かないですし。最近疲れきって倒れそうです。本当に倒れたらもっと迷惑かけますから。 【JSL2 B-6】

(6) 実、私はこの1ヶ月ずっと土曜を返上して残業してきました。物凄く疲れました。今週こそ土曜日を休もうと思っています。そうしないと自分が倒れそうで、来週は出勤できなくなるかもしれません。

【JSL3 A-34】

例(1)～(6)を見ると、滞在期間が短いJSLが「学費」や「両親の来日」といった学校や家族のことを挙げているのに対し、滞在期間が長いJSLは「二十五日が給料日」、「倒れたら迷惑をかける」、「土曜を返上して残業する」といった、日本での生活や仕事の経験を踏まえた理由を挙げている。これは、日本での滞在期間が長くなるにつれて日本での仕事の経験も増え、意識する内容が学校や家族という狭い範囲から広がり、より日本的になっていくためだと考えられる。同時に、発話も長くなっている。

4-2-2 代案の発話内容からの考察

Beebeら(1990)は、同じDCTの調査を分析し、日本人は他の言語に比べ代案を示さない傾向があることを指摘していた。しかし本研究は、普通の友達と普段あまり話すことのない上司の2場面で、日本人の代案が17例あった。それに対して、JSL1は7例、JSL2は9例、JSL3は11例であった。また、JJとJSL1-3の代案の発話の平均長さ¹³⁾を比べると、最も長いのはJSL3で24文字、二番目はJSL2とJJ18文字、最も短いのはJSL1の17文字であることが分かった。すなわち、JSL3はJJ、JSL1、JSL2に比べ、より長い代案を示しているため文字数が多くなっている。さらに、JSL1-3の代案の発話内容を見ていく。

〈普通の友達に借金を頼まれた場合〉

(7) 少しはできるけど。 【JSL1 C-3】

(8) 他の人に聞いてみたら。 【JSL1 A-32】

- (9) 1万円だったら、なんとかなるけど。 【JSL2 B-3】
(10) 他の人に聞いてほうがいいかしら。 【JSL2 B-4】
(11) 他の余裕がある友達に聞きにいったらどうですか。 【JSL3 C-24】
(12) バイトの紹介はいくらでもありますけど。 【JSL3 B-10】
(13) こまったことあれば、話しは聞くからさ。 【JSL3 B-23】

例(7)～(13)からわかるように、「他の人に聞く」のような代案の場合、JSL1とJSL2の「他の人」に比べ、JSL3の「他の余裕がある友達」のほうがより具体的になった。また、「少しならいい」のような代案の場合、JSL2の「1万円だったら」はJSL1の「少し」に比べ、より具体的になった。一方で、JSL3のみは「バイトの紹介」と「悩み相談」の代案を示した。

〈普段あまり話すことのない上司に残業を頼まれた場合〉

- (14) 月曜日だったら助かりますけど。 【JSL1 B-28】
(15) 他の方に頼んでいただけませんか。 【JSL1 B-13】
(16) 日曜でもよろしいでしょうか。 【JSL2 B-4】
(17) とりあえず他のメンバーに当たってみませんか。 【JSL2 B-6】
(18) 月曜の朝早めに来て仕事を片付けてもよろしいでしょうか。 【JSL3 C-21】
(19) もしどうしても私がいなければいけなかったら、出勤します。 【JSL3 C-5】

例(14)～(19)で示したように、「他の日でやる」のような代案の場合、JSL1とJSL2はただ「自分ができる日はいつなのか」という代案を示すのに対して、JSL3はただ「自分ができる日はいつなのか」だけではなく、「どうやってするか」まで具体的に示した。

例(7)～(19)の発話内容から、滞在期間が長くなるにつれて、JSLは滞在期間が長くなる中で培った日常の経験を、多岐にわたる具体的な代案として示せるようになっていくことが分かる。その結果、発話の文字数も多

くなっていると考えられる。

4-3 日本語の会話能力の影響

4-2の事例にみるように、滞在期間が長くなるにつれて、JSLは具体的な理由や代案まで示せるために発話が長くなるだけでなく、敬語・丁寧表現をある程度使いこなせるようになったので、より長い単語が増えたためもあると思われる。

まとめと今後の課題

本稿は、意味公式と文字数による分析から、日本滞在期間の長さが中国人日本語上級学習者の発話の長さによどのような影響を与えるかを考察した。その結果、以下のことが明らかになった。

- (1) データ分析の方法に関して、本稿では先行研究でよく使われる意味公式による分析の方法を主に使用しながら、新たに文字数による分析の方法も試みた。その結果、意味公式のみでは測れない部分を文字数の分析により明らかにすることができた。そのため、意味公式のみで分析するより、文字数による分析も加えたほうが、発話の長さをより正確に測ることができると言える。
- (2) 滞在期間が長くなるにつれて、JSLはJJに比べて徐々に発話が長くなる傾向が見られた。これは、4-2と4-3で示したように、JSLが具体的な理由や代案を示せ、敬語・丁寧表現のような長めの単語がある程度使えるまで会話を高められる能力を身につけた結果である。

今後は、今回の調査と少しずつ条件を変えていき、まずは日本滞在期間が今回の調査対象者よりも長い中国人日本語上級学習者と、全く日本に来たことがない中国人日本語上級学習者を扱ってみたい。そして、日本滞在期間と発話の長さの関係の他にも、学習者の語用論的能力に影響を与え得る要因を加えて調査し、中国人日本語超上級学習者の語用論的能力の習得プロセスを、引き続き探っていきたいと考えている。

注

- 1) 「中間言語」という概念は、Selinker (1972) によって提示された。Selinker (1972) では、中間言語とは、第二言語学習者が目標言語を習得する過程で内在的に構造化される体系であり、目標言語に向かって発達していく動的な言語体系であるとされている。つまり、第二言語学習者が目標言語を習得していく過程の中、彼らの母語とも目標言語とも異なる、まさにその中間にある言語体系を作り上げていくという考え方である。
- 2) 今回のデータが記述式のデータであり、会話のような、言葉数が少なくとも答える時間が長い(間延びしたり、つまったりする返答) 場合がほとんど見られないため、言葉数のみに焦点を当て、発話の長さを考察した。
- 3) 藤森(1994) では、意味公式は発話行為を分析する際の単位として定義されている。それは発話を社会的相互作用の中で見た場合の発話行為具現化のための最小の機能単位だと考えられる。例えば、{詫び} という意味公式は、「相手の意向に添えないことを負担に感じている表出」という意味機能を果している。意味公式は { } と表記する。
- 4) 日本の企業で事務職に就いているため、会社の社会文化的規範を会得していると考えられる。
- 5) 全員日本語能力試験1級に合格しており、全員の文法能力が上級レベルに該当する。また、全員の80%以上は文系の学生であり、大学で日本語や日本文学などを専門としていた(いる)。全員の82%は日本で日本語使用のアルバイトをした経験がある。これらから、全員の日本語のコミュニケーション能力も上級レベルに該当すると考えられる。
- 6) 中国の企業で事務職に就いているため、中国の会社の社会文化的規範を会得していると考えられる。
- 7) 学習者の日本語母語話者との接触状況を調べるため、以下の質問項目を設定し、接触状況を以下のように数値化し、カウントした。

①職歴：日本(アルバイトも含む)(期間が長い順から3つを書いてください)

職種1 _____ 日本人との接触(多・中・少)

職種2 _____ 日本人との接触(多・中・少)

職種3 _____ 日本人との接触(多・中・少)

②日本での学校生活：

・日本人の先生との接触(多・中・少)

・日本人のクラスメートとの接触(多・中・少)

数値化の方法：「多」は3点、「中」は2点、「少」は1点。

③日本での日常生活：

・日本人の友達の数：A. 10人以上 B. 5人ぐらい C. 5人以下

中国人日本語上級学習者の発話の長さや情報量の関係

- 数値化の仕方: 「A」は3点、「B」は2点、「C」は1点
- ・日本人との交流会に参加したことがありますか。A. ない B. ある
- 数値化の方法: 「A」は0点、「B」は1点
- ・日本人家庭へのホームステイ
- A. 行ったことがない B. 行った (10回以上・5回ぐらい・5回以下)
- 数値化の方法: 「A」は0点、「Bの10回以上」は3点、「Bの5回ぐらい」は2点、「Bの5回以下」は1点

以上の各項目得点の合計を接触量の得点とカウントした。

- 8) 石村等 (1997) では、パラメトリック検定の一元配置分散分析とは、3個以上の正規母集団のグループ間の差の検定で、帰無仮説全てのグループの母平均が等しいが成り立つかどうかを検定することであるとしている。
- 9) 本稿では、藤森 (1994) と伊藤 (2004) の分類を採用が、実際にデータを分類する際、まず、音声データが無いため、アクセントなどが聞けず、{ためらい・反復} か {相づち} かを判断し難い。また、藤森 (1994) と伊藤 (2004) の「相手との関係を維持したい旨の積極的な働きかけ」の {代案} には、相手の意向に添えない状況に変わって自分からする場合と、自分ができなくても他の人を紹介する場合の2つがあり、この意味公式の定義を補足する必要があると考えられる。さらに、伊藤 (2004) の「断りの保留」という {条件} の定義で、判断が難しいと感じられるケースがあり、これについても補足する必要があるように思える。以上の3つの理由により、藤森 (1994) と伊藤 (2004) の {ためらい・反復} {相づち} {代案} {条件} の定義と分類を修正した。そして、藤森 (1994) と伊藤 (2004) の分類に合わない意味公式 {言いよどみ} {呼称} {非難} {賞賛} を追加した。
- 10) この中国人は社会人としてのキャリア歴が長く、対外的な文書を作成する仕事をしており、言語感覚が優れている。
- 11) 1 モーラは、1 音節のことを指す。
- 12) 2 場面における 1 人当たりの {理由} の使用回数 = 各グループの全回数 ÷ 各グループの人数
- 13) 代案の発話の平均長さ = 各グループの全代案の合計文字数 ÷ 各グループの代案例数

参考文献

- 李 善姫 (2004) 「韓国語日本語学習者の『不満表明』について」『日本語教育』12号、27-36頁。
- 生駒知子・志村明彦 (1993) 「英語から日本語へのプラグマティック・トランスファー——『断り』という発話行為について」『日本語教育』79号、41-52頁。

- 石村貞夫・アレン、デズモンド(1997)『すぐわかる統計用語』東京図書、218頁。
- 伊藤恵美子(2004)『マレー語母語話者のポライトネスの諸相——勧誘・依頼行為に対する返答を中心に滞日期間の観点から』名古屋大学大学院国際開発研究科博士学位論文。
- 関山健治(2004)「第二言語習得語用論の潮流とこれからの英語教育(シンポジウム第2言語習得語用論)」『語用論研究』6号、47-55頁。
- 藤森弘子(1994)「日本語学習者に見られるプラグマティック・トランスファー——『断り』行為の場合」『名古屋学院大学日本語・日本語教育論集』1号、1-19頁。
- 蒙 韞(2008)「中国人日本語上級学習者の語用論的転移の一考察——依頼に対する断り表現のポライトネスの表し方から」『国際開発研究フォーラム』36号、241-254頁。
- ROUNGTHEERA Wanwimon(2004)「タイ人日本語学習者の『提案に対する断り』表現における語用論的転移——タイ語と日本語の発話パターンの比較から」『日本語教育』121号、46-55頁。
- Beebe, L. M., and Cummings, M. C. (1996). Natural speech act data versus written questionnaire data: How data collection method affects speech act performance. IN: S. M. Gass and J. Neu(Eds.), *Speech Acts across Cultures: Challenges to Communication in a Second Language* (pp. 65-83). New York; Mouton De Gruyter.
- Beebe, L. M., Takahashi, T., and Uliss-Weltz, R. (1990). Pragmatic transfer in ESL refusals. IN: Scarcella, R. C., Andersen E. S., and Krashen S. D. (Eds.), *Developing Communicative Competence in a Second Language* (pp. 55-73). Rowley, MA: Newbury House Publishers.
- Blum-Kulka, S., and Olshtain, E. (1984). Requests and apologies: A cross-cultural study of speech act realization patterns(CCSARP). *Applied Linguistics*, 5, 196-213.
- Brown, P., and Levinson, S. (1987). *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge; Cambridge University Press.
- Selinker, L. (1972). Interlanguage. *International Review of Applied Linguistic in Language Teaching (IRAL)*, 10, 209-231.
- Takahashi, T. and Beebe, L.M.(1987).The development of pragmatic competence by Japanese learners of English. *JALT Journal*, 8, 131-155.